

---

## Bar ~ Grief & Cocktails ~

哀川ジュン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Bar\Grief & Cocktails\

### 【Nコード】

N2304D

### 【作者名】

哀川ジュン

### 【あらすじ】

いつものBar、いつもの席、いつものマスターの笑顔……。そんな「行き着けのBar」で起こる日常的で何気ない出来事を綴る。酒好きの、酒好きによる、酒好きのための連載短編集。

## 第1話 似非紅茶に騙されて…

冬の足音がすぐそこまで来ている。

既にコートやジャケットなどを羽織らないと

この時間は辛いほどだ。

夕暮れ時・・・この時間帯を「逢魔刻」

なんて言うらしい。確かにこんな寒い薄暮時は

何か出てきそうな雰囲気だ。でも実際そんなのに遭遇したことはないが。

私はブーツを履いた足を震わせながら、いつものバーの扉を開く。ここは季節を問わず私を暖かくも涼しくも迎え入れてくれる場所だ。

少し大げさに着込んでいたトレンチコートを脱いでいつもの場所に腰を下ろすと、マスターがいつもの笑顔を見せてくれる。「いつも通り」が詰まった「行きつけの店」というのは安心できるばかりではなくて、何か嬉しさが沸いてくる。

「寒くなってきましたねえ」

「外の木枯らしは凄いですよ。なんか身体を

芯から暖めたいな」

「何か温かいものでも創りましょうか？」

温かいもの…定番で行けばホットウィスキーとか、アイリッシュコーヒーとかだろうか。しかし今はそういう気分じゃない。アルコールで芯から暖かくなりたいのだ。

「うーん、じゃあアースクエイクで」

「おっ、また凄いの行きますねえ。酒で身体を暖める  
寸法ですか？」

…さすがマスターには見抜かれてるようだ。

アースクエイクとは、ドライジンとウイスキーとアブサン  
を使ったアルコール度数の強いカクテル。お酒が弱い人とかには  
あまりお勧め出来ないものだ。アブサンの代わりに  
よくペルノーを用いたりもする。

材料の頭を取って、「アブ・ジン・スキー」なんて呼んだりも  
するらしいのだが、私はそんな風にいう人は見たことがない。

「地震」を意味する名称どおり、飲めば「震え上がる」程の刺激が  
あるのだ。

一口飲んでから、メンソールに火をつける。

ここでの一服が、また良い感じに身体を暖める。

「いらっしやいませ」

カランという入り口の鈴の音に反射的に振り向くと、見慣れない  
男性が一人入ってきた。多分一見の客だろう。

「あー、寒い寒い！！ビールね、生！！」

男は腰掛けるなり、大声で言う。なんともバーには場違いな  
客だ。マスターも顔では笑っているが、心の中では絶対  
黒いものが渦巻いているのだろう。

「あれ、オネーチャン一人？」

男がビールを飲みながらこちらをいやらしそうな視線で見してきた。

私は無視するわけにもいかずに、コクンと首を縦に振る。

「へー、一人でバーなんてカッコいいねえ。何飲んでんの??」

非常に大きな声で私に絡んでくる。

どうやらどこかでしこたま飲んできているようだ。

この辺りは少し歩くと、居酒屋やスナックが立ち並んでいる。

こんなに酔っ払っている客はBarには断然不釣り合いだ。

早く出て行つて欲しい… と思いつつも一応アースクエイクの説明を試みる。きつと男には「馬の耳に念仏」だろうけど。

「ふーん、なんかムズカシイな。でも詳しいんだねえ。

マスター、俺にも何かカッコいいやつ創つてよ」

男がわけのわからないオーダーをする頃、

私はアースクエイクを飲み干した。次は何にしようかと考えていると、また男が大きな声で話しかけてきた。

「なあなあ、俺さ、K市に住んでるんだよ。そいでしかも彼女募集中なわけ。一応ちゃんと仕事もしてるし…」

ナンパの積りだろうか？ 適当に相槌を打つてはみるが、いい加減ウザくなってきた。  
と、その時。

「お待たせしました」

マスターが男に「カッコいいやつ」を供したようだ。  
それは… ああ、コレかあ。

私は見た瞬間にマスターの意図を理解していた。

「なんだこりゃあ。アイスティーじゃないか」

「いえ、カクテルですよ？」

「・・・なんかアルコール入ってるのかわかんねーな。

炭酸入り紅茶みたいで・・・」

男はそのカクテルを勢いよく飲み干した。私もマスターも笑いを堪えるのに精一杯だ。男はまたビールをオーダーする。

… 20分後

男はふらふらに成りながらチェックを済ませると、千鳥足で店から出て行った。

「ロングアイランドアイスティーをあんな勢いで飲めば、

そりゃあ酔いますよ」

「マスターも悪者ですねえ」

「いやいや、ああいったKY君は早々に追っ払わないとね」

ロングアイランドアイスティー… 名前の割には紅茶を

言って気も使わないカクテルだけど、見た目も味もアイスティーにそっくりなのだ。しかしジン、ウォッカ、テキーラ、ラムと4つのスピリッツを全て使うために、結構な度数になる。

飲み易いからと言ってガブガブ飲むのはご法度のカクテルだ。

あのような明らかに場違いな者には、丁度良い「お灸」だったかもしれない。

いつものバー、いつもの席、いつものマスターの笑顔

そしてそこで起こるいくつもの出来事…。

きつとそこが酒場だからこそ、とりわけバーだからこそ

何気ない出来事ですら面白く思え、心も身体も暖かくなるのかもしれない。

## 第2話 『はじめて』の雰囲気

「お疲れ様」

年末に近づくにつれてポツポツと催される「忘年会」。

今年も会社の忘年会はいつも通りの

チエーン居酒屋にて催された。

美味しいとは言えない銘柄のビールに、

詐欺のように薄いチューハイやカクテル。

そして揚げてからかなり時間が経ったで

あろうと思われる揚げ物群に、

新鮮味のかけらも無い刺身。

チエーン居酒屋の安い宴会料理とは、

どこもこんなものなのだろうか。

「飲み放題で飲めて、適当に食べられればいい」

なんていう魂胆が丸判りだ。

まあ忘年会なんて、そういう雰囲気が基本形であらうけど。

やつと不味い酒と不味い料理から開放されたのは21時頃だった。

明日は休みだし、まだ飲み足りていない。

とは言うものの、飲み放題の基を取るべく

ビールはジョッキに5杯飲んで、

日本酒もいい具合に空けてきたのだが。

その飲みっぷりに男性社員どもは圧倒されていたようだ。

が、心の底では酔い潰れるのを期待していたと思う。

飲み会で「アフター」を期待する男性つてのは、

結構居たりするものだ。

結局私に関してはそんな心配は無いのだが。

私の足は自然にいつものBarの方向へ向いていた。



ここからなら5分も歩けば着く。

酒を飲むことが判っていたから、朝会社へ行くときも自分の車を使わずに、妹を叩き起こして送ってもらったのだ。だからどれだけ飲んでも構わない。

寒空の下歩き始めると、後ろから誰かが着いてきているような気配がした。

振り向くと1つ下の後輩、典子が居た。

「先輩、どこか行くんですかあ？」

家とは逆の方向に歩いてるし……」

「あ、うん。もうちょっと飲みたいなあゝなんて」

「私ももうちょっと飲みたいんですよ、

連れて行ってください」

典子は笑顔を浮かべて私の横まで小走りでやってきた。

見方によつては高校生くらいにも見える幼い顔立ちが印象的で、たまに何人かで飲みに行くと、必ずと言ってよいほど身分証明書の提示を求められる。

「いいけど、早く帰らなくてもいいの？お家の人心配するよ？」

「もう、小学生じゃないんだからあ！」

「アハハ、分かったわよ。じゃあ5分くらい歩くよ」

ふぐの様に頬を膨らましている典子を促して、

私はBarへ向かって歩き出した。

ここら辺一帯は居酒屋とスナックが軒を連ねている。駅に近い事もあってか、この辺りにしては多少は栄えているところだ。

だが夜は酔っ払いばかりで治安が良いわけではないので、私達は足早にBarを目指した。

「ええ、私居酒屋とかに行くかと思ってたら、  
ここって、バーですか？」

「そうそう。私の行きつけの店」

「わー、私バーって初めてなんです。なんか緊張するかも」

「いらっしやいませ」

扉を開くと、いつも通りジャズとマスターの声が出迎えてくれる。

私は典子をつれていつもの席に座る。他にお客は一人いた。

良くみる常連の加代さんだ。彼女も私と同じクチで、

Barで飲むことを何よりも楽しみにしている若い女性だ。

「あ、今晚は。今日は可愛い娘連れてるわね」

加代さんがタンブラーを傾けながら声をかけてきた。  
手に入っている小さなタトゥーが光って印象的だ。

「うん、職場の後輩なの」

「こ、こんばんは」

典子は私の後ろで小さくなりながら、細々とした声で挨拶した。  
元々結構人見知りする方だが、今日は時に酷い。

Barということもあつてだろうか。

「今日は、どこかで飲んできたんですか？ …はい、どうぞ」

「ちよつと会社の忘年会で。居酒屋の不味い酒

沢山飲んじやったから、お口直しに…」

マスターがお絞りを差し出しながら、鋭く推測してきた。  
おそらく微かな息の匂いや、服についている

匂いから嗅ぎ当てたのだろう。いつもながら恐ろしい洞察力だ。以前餃子を食べた後店に行ったときなど、

ボロクソに言われたものだ。

そして口の中を消毒しろと、ビーファイターをショットで一氣に飲まさせられた。

「今日は、何に致しましょうか？」

「うーん、ちょっとスッキリしたいからまずジン・フィズ」

「はい、かしこまりました。…お連れさんは？」

「・・・あ、私ですか？え、…えーと、カクテルを」

典子はいきなりオーダーを聞かれ、焦っているようだ。

「アンタねえ、カクテルって言ったって星の数ほど在るのよ」

「ええ、でも分からないんですよ、こういう所初めてだから…」

カウンターの向こうでジンの瓶を取り出していたマスターが急にこつちを向いて、クスッと笑った。

「そんなに緊張しなくてもいいですよ。Barだからって変に気を使う方が多いですけど、Barも結局は大衆的な飲み屋なんですから。飲みたいお酒のイメージを言ってくだされば大丈夫ですよ。」

甘いのか、辛いのか、色が綺麗だとか」

「は、はい。じゃあ甘くって、そんなに弱くなくって綺麗なのを・・・」

「かしこまりました」

マスターはそういうと、冷蔵庫から銀色の装置を取り出した。それは紛れもなく「エスプーマ・マシン」。

カクテルの材料の一部を泡にする機械なのだ。

これを用いたものを「エスプーマカクテル」と言い、泡と液体、両方の食感を味わえるカクテルとなる。

中々これが出来る店は少なく、創始者は

G 県のとある Bar のバーテンダーだという。

「あ、エスプーマだ！ズルイ、私も欲しいなあ」

「スイマセン、これで今日の泡は終わりなんですよ。

さつき加代さんにもお出ししちゃったから・・・」

「ええー、ショック」

私は腹いせにジン・フィズを半分くらい一気に煽った。

典子はと言うと、シェイカーを扱うマスターを

興味津々といった眼差しで見ている。やがてマスターは

完成したグラスを典子の前に差し出した。

「わあ、綺麗」

「サイドカーというブランデーベースのカクテルに、

巨峰のリキュールとジュースを合わせた泡を乗せたものです」

サイドカーのオレンジ色と巨峰の泡の、紫のコントラストが

綺麗に仕上がっている。

いつもながらエスプーマカクテルは、見た目も楽しめるものだ。

「美味しい！こんなに美味しいお酒はじめてかも」

典子は一口飲むと、恍惚の表情を浮かべた。

「ね、典子、私にも一口・・・」

「え、ダメですよ。これは私だけのもの」

「ケチ、ちよつとだけでいいから……」  
「しょうがないなあ……」

私は半ば強引に典子からグラスを奪うと、  
泡と液体のなるべく中間を飲むように一口飲んでみた。

・・・サイドカーの少し強い味と、巨峰の泡の  
クリーミーで甘い味が見事に調和している。

こういった味が重なると互いが自己主張しあってしまいがちだが、  
このカクテルはそれが全く無い。

冗談抜きで、単なる酒ではなく芸術品の粋ではないだろうか。  
私はあまりに感動して、しばらくボーっとしてしまっていた。

「先輩、そろそろ返してくださいよっ！」

その声で私は我にかえって、典子にグラスを返す。

「マスター、久々に感動しちゃったかも。これ、凄い」

「いやいや、そんな大げさな」

「いや、マジで。見た目、味、フレーバーどこをとっても、

私が今まで飲んできたカクテルの中で3本の指に確実に入るかも」

私がまだ少しボーっとした目でマスターを見つめると、  
マスターはグラスを拭く手を止めた。

「Barってのは、堅苦しいイメージがどうも拭えないらしいので  
すよ。」

だから中々Barの敷居は高く思われるみたいなんです。  
でもね、一度入ってしまえばこういったアットホームな  
雰囲気の中で色んなお酒が楽しめるんです。

「お酒を楽しんでもらう」ために、見た目、味、雰囲気  
最大限にカクテルとしてお客様に提供するの  
私の仕事ですからね。初めてBarにいらした方も、  
楽しんでいただけるようなカクテルを創るところがね」

「じ、自分でアットホームとか言っちゃってるよ」

端の席から加代さんの笑い声が飛んだところで、  
マスターの話は途切れた。

「…折角いい事言ったつもりなのに」

マスターは不貞腐れたような顔をして、またグラスを拭き始めた。  
典子も私も大笑いをしながら、

加代さんと改めてグラスを重ねたのだった。

### 第3話 究極のドライマティーニ

「とうとうちらつき始めたよ」

「ついに降ってきましたか。今日は特に寒かったから…」

私は肩と頭に少しだけかぶってしまった雪を入り口で掃って、コートを脱いだ。

外はこの冬一番の冷え込みで、今年の初雪だ。例年と比べると少し遅めの初雪かもしれない。

しかし道路の凍結とか、雪かきとかを考えたらずいしも降っては欲しくないものだ。

「既に屋根はスノースタイルですか？」

「…分かる人にしか絶対笑えない駄洒落だね、それ。ちょっと暖房もつと上げて！」

「いや、そういう積りじゃないですよ？」

マスターはバツが悪そうに私にお絞りを渡すと、本当に暖房の温度を上げた。

本来Barの空調は、暑過ぎず寒過ぎずが基本である。酒を飲むに当たってもそうだが、

酒自体の品質管理にもその方が適しているわけだ。しかし保存が難しい品質の酒は、夏でも

冬でも冷蔵庫や冷凍庫にいれておくべきであるけど。

「今日はどうしましょう？」

お決まりのオーダーを取るセリフが飛ぶ。

「そうだなあ・・・折角雪が降ってるし…」

「スノースタイルですか？」

「いや、それはもういいから」

いつになくマスターは親父ギャグっぽいのを連呼してくる。

何か飲んで酔っているのだろうか。それともどこかで頭でもぶつけたのか。

そんなマスターを尻目に、「冬っぽいカクテル」を考えてみた。

アラスカ、モスコミュール、ブラックルシアン、…いかにも寒そうな地域の名前ばかり。

雪国、マルガリータ、ソルティ・ドッグ …これじゃマスターの思案壺。

「じゃあ、マティーニ」

「は？ はい。かしこまりました」

結局はいつも通りのチョイスになってしまった。あれだけ考えた挙句、

マティーニだったためにマスターも狼狽が隠せないようだ。

オーダーに困った時は、マティーニを頼むに限る。カクテルの王様とも

呼ばれているこのカクテルは、材料であるジンとベルモットの種類は勿論、

創る人によっても全く風味が違ってくるもので、いつ飲んでも飽きない。

「ええと、タンカレーとチンザノでしたね… あら！」

「え、どうしたの？」

マスターはチンザノの瓶を逆さにする。どうやらチンザノが品切れになって

しまっているらしい。

「スイマセン、在庫が切れてましてね。…ノイリープラットじやあダメですか？」

「えー、ノイリー？」

私はチンザノのかすかな甘みとタンカレーのスッキリした辛さが調和したのが、一番

シックリくるのだ。ノイリープラットだと辛口になりすぎて舌が痺れる感じになる。



どうせマティーニにするのなら、あまりにも極端に辛口は避けたい。そうするくらいなら…

「じゃあマスター、タンカレーをショットで。あとそのチンザノの瓶もここに置いて」

「え、タンカレーだけで？あ、まさか・・・」

マスターは怪訝そうな顔でショットグラスを出すと、タンカレーを注いで、

チンザノの瓶と一緒に私の前に出した。これぞ、「究極のドライマティーニ」だ。

どうせノイリーを用いてそこまで辛口にするのなら、いつそこうしてしまった方が

良かったりする。飲み方は勿論、チンザノの瓶を眺めながらタンカレーのストレートを飲んで

マティーニの味を想像するのだ。これをやる人はそうそう居ないだろう。特に私のような若い女が

やっているなんて、日本中探して何人居る事か…。でも・・・

「いかがですか？「ドライマティーニ」のお味は」

「…うん、やっぱりどう味わってもタンカレー。やっぱりマティーニはならないね」

「ハハハ、そうでしょう。私も実は一時期その飲み方にはまっぴりなんですがね、余程の

妄想力が無いと、マティーニの味にはなりませんよ」

要するに、私にはまだこの究極のドライマティーニを味わうには色々と未熟なのだろうか。

やはりそれなりの経験と年恰好が必要なかもしれない。何か恥ずかしさが沸いてきて、

私はショットグラスを一気に空けてしまった。

「やっぱり別なのにするかな…」

「じゃあ、スノースタイルの何かで宜しいですね？」

「いや、それはもういいから！・・・じゃあ冬っぽくオールドセントニックのウィンターライで」

「オン・ザ・ロックですね、雪っぽくフラップドアイスで・・・」

「マスター、やっぱり酔ってるでしょ？」

## 楽しさと面白さ（前）

「・・・で、久々に調理専門学校同期だった子達と飲みに行ったんです」

「同窓会的なやつ？」

「同窓会ってか、報告会みたいなものですよ。みんな大手の食品会社に行ったり

市の給食センターで働いたり、結構しつかりやってるな、って」  
「ヒトミちゃんだって店のオーナーじゃない。しつかりやってると思うけどね」

秋が深まってきたBarのアミューズは秋刀魚とかぼちゃのパイ。そして飲み物はアンバータイプのビール。  
まさに秋という感じだ。

「このパイ、なんでニシンじゃないの？」

「ニシンって春の魚ですよ…？あ、もしかして「あれ」言いたかったんでしょ？」

「『私これ嫌いなよね』」

「そんなつもりで作ったんじゃないんですよ。ハロウィンのカボチャと、秋の旬の

秋刀魚をあしらって、お洒落かなと」

アミューズとはいえ、さすが調理専門学校を卒業しているヒトミちゃんだけあって

お洒落で凝ったものをだしてくれる。やはり食も酒も「飲食する楽しみ」が無いと

駄目だ。このパイは別な意味での「楽しみ」もあるから面白いのだけ。

と言うのも、この間はトーストの上に硬く焼いた目玉焼きを乗せたもの、その前は

超厚切りベーコン。明らかに狙っているとは思えない。

そんなに空を飛ぶものがヒトミちゃんは好きなんだろうか？

「そうそう、食べる楽しみって言えば、市内の給食センターで働いてる子が、

献立考えるの大変だって言っていましたよ」

「栄養士なの？」

「はい。栄養バランスだけじゃなくて、いかに食べる楽しみを与えるられるかが

ネックだって。給食も「食育」って言って、教育の一環らしいです」

たしかに給食に関しては最近色々問題が起きているようだ。

給食費未納問題や、それが影響しての献立の極端な簡素化。

また、「居酒屋風給食」「超ミスマッチ献立」など、常識では考えられない

献立も数多く存在するそうで、私が小中学生のころとは大違いみたいだ。

「で、私も色々考えてみたんですがね。…それで美紀さん、お腹空いてます？」

「全然話のつながりないじゃん。まあ Pasta くらい食べられるくらいの空腹かな」

「じゃあ、ちょっとだけ試してほしいのがあるんですけど」

そういうとヒトミちゃんは奥へ入って行き、しばらくすると色々乗ったトレーを

持って運んできた。

「なにこれ？牛乳…？ パスタ？ それに…」

「はい、学校給食を参考に作った『大人の給食セット』です」

「じゃあもしかしてこれはパスタじゃなくて…」

「はい、ソフト麺です」

『大人の給食セット』は、見た目は普通の学校給食に見える。

しかしそれは本当に見た目だけで、恐ろしい「仕掛け」がしてあったのだ。

「へえ、ミルメークなんて懐かしいね… って、これカルーアじゃん！」

「はい。大人の給食セットですから。ミルメークに似たものといえはカルーアでしょ」

さらにソフト麺のソースは辛目のカレーソース、サラダはゴルゴンゾーラを使った

シーザーサラダ。おあつらえ向きにレタスなどはしっかり茹でてある。そしてブランデーに

漬けたラ・フランス。

「よくソフト麺なんか手に入ったね」

「最近のスーパーでも一般家庭用に販売しているんですよ。給食センターで働いてる子の

話聞いてたら、なんか懐かしくなっちゃって。正直私、給食の時間が憂鬱だったんです。

信じられないかもですけど、結構偏食だったし食べるの遅かったし。

だけど今振り返ると、なんか懐かしいからまた食べてみたいかなんて思ったりして」

「あ、それは分かるかも。私のお父さんが昔、『脱脂粉乳はまずかつたけど、いい思い出だ』

とか言ってたことあるもん」

ということとはアミューズに出てきた秋刀魚とカボチャのパイも、この給食の理念から  
ヒトミちゃんの頭に派生したいわゆる「食べる楽しみ」の一つなのだろうか。

確かにソフト麺なんて学校給食を食べなくなってからお目にかかったことは無い。

スーパーで販売されていたことすら知らなかった。

現役で食べていた頃は伸びきったパスタという感じでどうも好きにはなれなかったが、

今食べてみると懐かしい味がして、不思議と美味しく感じる。

人間の味覚って言うのは、こういうところが不思議だ。なにか「楽しみ」や「面白さ」

があれば、普段そうでもないものまで美味しく感じられてしまう。

私がすっかり食べ終わった頃には、ヒトミちゃんは既に店の片づけをしていた。

私も自分の食べた食器の洗い物を少し手伝い、ヒトミちゃんは店内の掃除をして

施錠をし、看板のライトを消すと、私と一緒にバックヤードへ入った。

「さて、と。美味しいものを食べたすぐだけど、また美味しいもの貰おうかな？」

そういつて私はヒトミちゃんの肩に手をかける。最近はいつもここでヒトミちゃんと

愛を確かめ合っている。ヒトミちゃんの部屋ですればいいのだが、最近はお互いに部屋まで待てないのだ。

軽い口付けの後一旦唇を離すと、今度は深い口付けを交わす。

既に私の手はヒトミちゃんの服の中に入りっており、ヒトミちゃんの息は次第に荒くなっていく。

唇を離すとヒトミちゃんも私の胸に手を差し入れてくる。

それを合図に、私は手を下のほうへ持っていくと、ヒトミちゃんのスラックスに手をかける。

「…美紀さん」

「ん？どうしたの…」

「……その…、なんでもないです」

「そう」

スラックスを下げると、ヒトミちゃんをますます快感の渦にのめり込ませていった。

「どうする？部屋でもう一回する？」

一段落ついた後、テーブルの上で乱れた服も直さずにタバコ吸いながら寄り添っていた。

快感を得た後はあまり動きたくは無い。酒で酔う以上の心地よさがそこにはある。

だが、今日は違った。

「…美紀さん、ちょっといいですか？」

「うん？なんかさっきからヒトミちゃん変じゃない？なにかあったの？」

「その、…もうこんなことやめませんか？普通の関係に、戻ったほうがいいかなって  
思ってる」

私は一瞬、ヒトミちゃんが何を言っているのか分からなかった。

「え？どういうこと？」

「どういうことって、そのままですよ。私は美紀さんが大好きです。ただこのまま

こんな関係を続けてても、なんかダメな気がして。普通に男性と恋愛したほうが、

お互いのためなんじゃないかなって…」

「ちよつとまって。レズビアンが普通じゃないって言うの？ダメだって言うの？」

「そうじゃないです。でも、日本では同性同士の結婚は出来ないでしょ？それに世間からの

風当たりも良くないし…。女の人と付き合っている、なんて友達とかの前で大っぴらには

言えないですよ」

確かに今の日本では同性愛はタブー視される傾向にある。アニメや漫画などでは認知されている

らしいが、現実となれば引かれるケースが多い。現に私も家族や同僚、友達に女性と付き合っているとかカミングアウトしたことはない。

でも決して恥ずかしいことだともいけない事だとも思っていない。もしバレたらその時はそれで構わないのだ。

「でもさ、好きな感情に男も女も関係ないじゃん。私はヒトミちゃ



んを愛してるんだし。

ヒトミちゃんだっけ私を愛してるんでしょ？」

「そうだけど…。じゃあ美紀さんは結婚願望はないんですか？」

「…結婚かぁ。正直無いかな」

「……」

しばらくの間沈黙が流れた。聞こえるのは、マスターが遣していった時計の秒針だけ。

すっかり灰になったタバコを灰皿でもみ消すと、私は起き上がって下着と服を直し始めた。

本当はヒトミちゃんをもう一回押し倒そうかと思ったが、さっきまで残っていた快感は

すっかり消し飛んでいる。「楽しみ」や「面白さ」が無ければ性行為も「まずく」なる

ものなのだ。つまり強姦は焦げきったポテトと一緒に。

「じゃあ今日はとりあえず帰るね。ヒトミちゃんはそう思っても、私はヒトミちゃんの

こと、諦めないから…」

「……」

ヒトミちゃんから返事は無かった。軽くすすり泣く声を背に私はバツクヤードの勝手口から

外へ出た。もしかしたらここから出るのも最後になるのかもしれない…。

眩しい看板が立ち並ぶスナック街は相変わらず酔っ払いの集団がノロノロ歩いている。

日常。

ヒトミちゃんと体を合わせているときは、ある意味非日常的な快樂を歩んでいる。

しかしここは冷たい日常。思わずスナックの看板が滲んで見える。なんとか抑えようとしても涙が止まらない。私はビルの陰に入ったところでしゃがみこんで

しまった。今まで「フラれる」という経験は人生の中で一度もなかった。

いや、正式にヒトミちゃんにフラれたわけじゃないけど。

少し落ち着くと近くのコンビニへ入り、ウイスキーのポケットビンを買う。

ポケットビンを手に私は公園まで行くと、ベンチに座ってウイスキーを思いっきり

流し込んだ。ひどくまずい。安いバーボンだけど、こんなにまずいはずは無いのに。

まずく感じるだけかもしれない。自棄酒は美味しいはずが無い。

でも、そうでもしなければモヤモヤした気分が落ち着くはずも無かった。

そんな飲み方をすれば酔いが回るのも当然で、すぐに目の前がグニヤグニヤしてきた。

それでも私はポケットビンを口に運ぶ。すっかり飲み干してしまつたところでベンチから

身体が落ちて地面に突っ伏した。ひどく眩暈がする。喉が恐ろしく渴いて、焼けそうに

熱い。

「・・・!!」

誰かが呼んでいるらしいが、もはやはつきりと聞こえない。そのまま私の意識は遠のいていった。

## 楽しさと面白さ（後）

目が覚めると病院のベッドの上だった。

公園のベンチから崩れるように倒れた私は、通りがかりの男性が呼んでくれた

救急車に乗せられて救急病院に運び込まれたらしい。

点滴を腕につながれて処置室で寝かされている私の横には父と妹がいた。

「全く急性アルコール中毒なんて。人様に迷惑かけるような飲み方するんじゃない」

「お姉ちゃん、どうせ馬鹿みたいに飲んでたんでしょ」

父と妹に責められ、立場上何も言い返せない私。

何も言わずにただ点滴の液体が落ちていくのを眺めていた。

そのうち当直と思われる医師が来て、今夜は病院で過ごし、朝には退院しても良いとのことだった。

それから二日間、仕事に行く気にもならず家の自分の部屋に閉じこもっていた。

いつもならヒトミちゃんからメールが来るのだが、携帯電話は無言のまま。

三日目。

さすがに仕事も休めないなので重い気分のまま出社する。

案の定仕事には身が入らない。モヤモヤしたものが消えないまま、一週間が過ぎた。

医者にもアルコールは控えめにと言われていたし、飲むような気分でもなかったから、

私にしては珍しく、一滴も飲んでいない。

会社と家を往復するだけの日々だ。毎日家で夕食を摂っているので、父も妹も

不思議がつている。私としてもあんな醜態を晒してしまった以上、しばらくは自重

しなければいけないと思っていた。

それから2週間後。既にヒトミちゃんと連絡を取らなくなって三週間になる。

医者からは適量だったら飲んでも良いとは言われたものの、どうも身体が酒を欲しない。

食欲も減退している。それでも食べなければ身体に良くないため、無理に箸を動かして

いた。食卓には私と父だけ。

「そついや美紀、今週の日曜日は家にいてくれよ」

「え、なんで？」

「紬が男を連れてくるんだと。婚約したそうだ」

「・・・へえ。もう随分付き合ってたみたいだけど、婚約したんだ」

「なんだ、そんなに前から付き合いがあったのか」

「大学の中からじゃない、確か」

「で、美紀はどうなんだ？」

父に痛いところをつかれて、箸を止める。

「色々忙しいからさ。それに私まで結婚して家を出ちゃったら、お父さん大変じゃない」

「俺のことは気にしなくていいさ。そりゃあ婿養子にでもなってくれば一番いいけど、

そつも言ってられないだろう。女の子が二人生まれたところで、

俺は決心してたさ」

翌日の帰り道。街中のコンビニで買い物をしていると、ふと肩を叩かれた。

振り返るとヒトミちゃんの姿がある。

「あ・・・」

「美紀さん、なんか久しぶりですね」

「う、うん」

「あの、ちょっとだけいいですか？話したいこと、あるから」

「…話したいことって、どうせ別れようってことでしょ？もついいから…」

「そうじゃないんです！…ここじゃなんだから・・・」

私とヒトミちゃんはコンビニを出ると、私の車で人気のない廃工場の陰に来た。

しばらくの間二人は無言だったが、沈黙を破ったのはヒトミちゃんだった。

「…美紀さん。実は三日前からお店を休んでるんです」

「え、どうして…？」

「その…、話すと長くなるんですが。美紀さんにあんなこと言ったのも、関係して

るんです。私、先月から強引にプロポーズされてた人がいて…。

それでなんか

訳が分からなくなっちゃって、美紀さんにあんなこと言っちゃたんです。

それで、その人があまりにしつこいから、「女性と付き合ってる」って、つい

言つて。そしたら凄く引かれて、気味悪がられて…」

私は何も言わずに助手席のヒトミちゃんを抱きしめていた。

日曜日。

私とヒトミちゃんは私の家のキッチンにいた。

せっかく妹が婚約者を連れてくるので、何か料理を作ってもてなそうと思つたのだ。

「美紀さん、あとはスペイン風オムレツだけです」

「はい。玉子残りあつたつけ？」

「3個あるから大丈夫ですよ」

たくさん料理を作るのは大変なので、ヒトミちゃんが手助けに来てくれた。

普段Barで作っている料理をたくさん作ってくれている。

「お義父さん、お義姉さん、よろしくお願いします」

「まあまあ、竜也くん。そんなにかしこまらないでよ。ねえ、お父さん」

「…君にお義父さんと呼ばれる筋合いはない!!」

「・・・え？」

「ハハハ、言つてみたかったただだよ。さあ乾杯しようか」

妹が連れてきた婚約者の竜也くんとは何回か会っているので、和んだ雰囲気だ。

迎えることが出来た。それも、ヒトミちゃんが隣にいたから、かもしれない。

「今日の料理は、このヒトミちゃんが作ってくれたんだよ」

「へえ、美味しそうっすねえ」

「じゃあ、いただきまーす」

いろんなものに乗せたカナッペ、ゴルゴンゾーラを使ったシーザーサラダ、

鰹のカルパッチョ、ジャークチキン、ヒトミちゃんの店に置いてあるハモン・セラーノ

そしてスペイン風オムレツ。

「マジ美味しいです。ヒトミさんを嫁にもらう人は最高だろうなあ」

「あら、私よりヒトミさんの方がお似合いみたいね」

妹はうすら笑いを浮かべると、竜也くんの手の手甲を思いつきりつねった。

「いてて・・・、そ、そういうことじゃないって」

「ダメだよ、竜也くん。ヒトミちゃんは私が・・・ あ・・・」

「み、美紀さん」

思わず口を滑らせかけて、口を紡ぐ。ヒトミちゃんも私の脇腹を軽く小突いた。

「え、何？お姉ちゃん」

「な、なんでもないって。ヒトミちゃん、そろそろワイン開けよっか？」

「え、ええ、そうですね」

「・・・なんか変なの」

ヒトミちゃんがお祝いにと店から持ってきてくれたワインで、すっ

かり気分よく

酔ってしまった。やはり酒は楽しく面白く飲まなければ本当の美味しさは分らない。

沈んだ気持ちの時や、怒っている時に飲んでも少しも美味しくない。むしろそんな時の酒は「酔うための道具」にすぎないのだ。

ここ1ヶ月くらいでそんなことが身に沁みて分かった気がする。



## 女子会鍋論争

ここ近年、インターネットや雑誌で話題とされている「女子会」。今日は私とヒトミちゃん、私の友人の早苗とBarの常連の加代さんで、女子会なるものを

催すことにした。元々女子会とは「Sex and the city」の影響から、女同士でオシャレをして

集まって食事をしたり飲んだりすることを、ブログやファッション雑誌で「女子会」と言い出した

ことから、その名前が浸透して行ったそうだ。

寒い日が続いているので、今日は鍋料理が有名な店を予約した。

いかにもニューウェーブ居酒屋って感じの作りで、私たち以外にも女子会と思われる

女性の集団や、カップルが多い。

「じゃ、第1回Grief & Cocktails女子会を記念して、乾杯！」

「でもさ、なんでBarでやんないの？」

「私が落ち着いて飲めないじゃないですか。だからわざわざ定休日の日曜にしてもらったわけだし」

全員生ビールのジョッキを持って、豪快に飲み出す。周りの女性をみれば「オシャレな」

カクテルなどを飲んでいる中で、私たちはそれぞれの前に灰皿とビールジョッキを置いている。

まあ、これも女子会ならではかも。合コンではとても出来そうになりスタイルだ。

「でも美紀さんが幹事なら、他のダイニングBarとかを選ぶかと思っただのに、なんで鍋専門店

なんですか？この小説なら絶対そうなると思っただのに」

「ヒトミちゃんも甘いわねー。『女子会』オシャレ」の定義が私に通用すると思う？

ダイニングBarでオシャレなカクテル飲みながら、オシャレで美味しい料理なんて、ケータイ小説

でやってもつまないでしょ？」

「美紀、相変わらずメタフィクション全開だね」

「何よ、早苗は鍋嫌いなわけ？キムチ鍋」

「とんでもない。大好きだって。ただ、男の人の前ではちょっとね」

早苗にも一応「女の恥じらい」なるものがあるのだと、私は少しだけ感心してしまった。

男性の前でキムチ臭をばら蒔きたくない、という恥じらい…。

よく「焼肉を2人で食べている男女はただならぬ仲」と言うが、それはニンニク料理やら

キムチ鍋といったものでも言えるのだろうか？

そんなことを考えていると、注文したキムチ鍋が来た。周りをみれば、豆乳鍋だの

コーラーゲン鍋を頼んでいるが、私たちのテーブルはキムチ鍋。

「てつきり女子会っていうと豆乳鍋とかそういうのを頼むかと思っただけけど…」

「ヒトミちゃんも甘いわねー。『女子会の鍋』豆乳鍋」なんて…。

「はいはい、無限ループって怖いわね！そんへんでやめて、お鍋食べましょー！」

「チョット待った！」

いきなり加代さんが大きな声を出し、鍋に伸ばしかけていた早苗の箸を抜う。

「ど、どうしたんですか？」

「アンタ今鶏肉食べようとしたでしょ？ダシが出るからまだダメ！まず葉物から！」

「うわー、出たよ鍋奉行」

確かにキムチ鍋の場合、葉物をあまり入れておくと辛くなりすぎる場合がある。

「牡蠣は一通り食べてから入れましょ。固くなると美味しくないから」

「はい。鍋奉行さんにお任せします。でも、なんか色んなべがあるんですね。

豆乳鍋とかコラーゲン鍋はもう結構前からあるけど、最近はトマト鍋とかカレー鍋

ってのも人気が出てきてるらしくて。この店にもあるみたいです  
ね」

「でも私はトマト鍋ってやだな。いかにも洋風ってのがさ」

「でも美紀、このキムチ鍋だって、元々は韓国のキムチチゲが元になってるわけじゃん。

私はやっぱり醤油味の寄せ鍋か、みそ味のもつ鍋とか、そういう和風鍋が一番好きかな」

「じゃあ早苗はキムチ鍋いらないのね？鶏肉は全部没収！」

「あー、泥棒！」

「だから鶏肉はまだ早い！！」

こういったワイワイした雰囲気も、女子会というのだろうか。

まあ女性向け雑誌でよく書かれている女子会というのは「オシャレなワインBarで」とか

「美味しいカジュアルフレンチの店で」なんてのが多いから、鍋料理専門店なんてのは

王道とは言えないだろうけど、実際はチェーン居酒屋とかで催すグループは多いと思う。

その方が手頃で気軽だし、多少騒いでも大丈夫だ。

一時間後…。四人ともかなり飲み、鍋の中もほとんど食べてしまった。

「さて、ここからがホントのお楽しみですね」

「私、本当はこのために鍋を選んだという…。ここはしめのバリエーションも色々あるからね」

「これは鶏肉や牡蠣のダシが出ているから」

「は??」

加代さんの言葉に、私とヒトミちゃんと早苗は、思わずハモってしまった。

「え、雑炊だよ。最後に卵をかけ回して、三つ葉散らしてさ・・・」

「何言ってるんですか、加代さん。キムチ鍋って言えばうどんですよ?キムチうどん」

「美紀こそなにいつてんの?中華めんどしょ?良いダシだから美味しいキムチラーメンができる」

「早苗さん、ラーメンはもつ鍋や石狩鍋のようなみそ味でしょ？ご飯入れてチーズと塩胡椒入れた

リゾット風がいいですって」

「そんなフランスかぶれなものは却下！やっぱり雑炊がいいって！すいませーん！」

「雑炊セットね！」

「うどんうどん！」

「中華麺」

「チーズリゾットのセットお願いします！」

「あ、あの・・・？」

それぞれがてんでバラバラなオーダーをするので、店員のお姉さんはすっかり困ってしまっ

ている。最初から鍋の締めは揉めるんじゃないかと予想はしていたものの、ここまで意見が分かれるとは思っていなかった。

「えーっと、お決まりの頃にまた伺いますね」

私たちのあまりの剣幕に、お姉さんは逃げ出して行ってしまった。

「だから、雑炊にしようって。一番王道じゃん！」

「うどんだって王道だもん」

「ラーメンは譲れない！」

「・・・このままじゃ埒があきませんよ。幸いIHヒーターでいつでも温め直せるし、

もうちょつと飲みながら話し合いませんか？一品料理とかも結構あるみたいだし・・・」

「それで皆さんそんなに暗いわね」

三時間後。私たち四人はM A L T H E L Lに居た。

「結局飲んで食べながら鍋の締め言い合いなんかしてたらお腹いっぱいになって」

「本末転倒とは、まさにこのことですね」

私はモーレンジの炭酸割りを飲みながら、ため息をついた。

結局あれこれ言い合いながらビールだの焼酎だのを飲んで、一品料理をつついていたせいで

満腹になってしまい、折角のスープを4人して無駄にしまった。

「でさー、神谷さんは鍋の締めて言う何が好き？うどん？」

「鍋の締めかあ。やつぱり……」

「雑炊だよね？」

「ラーメンっすよね？」

「いやいや、リゾットでしょ？」

「餅、かな？」

「餅？うつそー！」

「お餅は途中に入れるものじゃない？」

「締めじゃない！」

「なんか違いますよね」

「何言ってるんだよ。俺の田舎ではいつも土手鍋で、最後は餅だったんだ。」

「そつえば誠くんは餃子が好きだと言ってたな……」  
「マスターが？信じらんない」

結局鍋の締めは、酒の好みと同様に人それぞれだ。

そのままの味で終わらせたいという人もいれば、手を加えて洋風にしたいという人もいる。

ここまで論争になるという鍋の締めは、もはや日本人にとって永遠の課題なのかもしれない。

「ところで次の女子会は？」

「あー、来月またあの店で。次はモツ鍋でリベンジするからね、早苗」

「モツ鍋なら中華麺ですよー！」

「ヒトミちゃん、みそ味だからこそ、雑炊でしょー！」

「加代さん、みそ味はうどんですって！」

「ラーメン、ラーメン！はい、多数決で決まり！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2304d/>

---

Bar ~ Grief & Cocktails ~

2011年10月4日15時57分発行